

厳島神社：扇子

この凝った装飾が施された扇子の現物は、現存しているこの種の品としては12世紀まで遡る日本最古のものの1つです。漆が塗られた5本の細長い木に紙を貼り付けて作られており、平安時代（794～1185年）の貴族に好まれていた夏用の扇の典型的なものです。紙は金と銀の葉で装飾され、1151年に作られた勅撰和歌集『詞花集』から引用した3首の歌が添えられています。神社の資料によれば、この扇は1180年に幼い息子に跡を継がせるため退位せざるを得なくなった高倉天皇（1161～1181年）が、そのわずか数カ月後に宮島を訪れた際に寄贈したものです。その書は、退位した天皇に同行して宮島に来ていた貴族で政治家の源通親（別名、土御門通親：1149～1202年）によるものと言われています。通親はその後1100年代の終わり頃には、宮廷で最も力のあつた個人の一になりました。引退した高倉天皇と通親による訪問と厳島神社への寄進は、平安後期にこの神社が貴族から大いに敬意を払われていたことを物語ります。ここに展示されている扇は複製品です。重要文化財に指定されている現物は、特別な機会にのみ展示されます。